

## 日本語教師初任者(外国人児童生徒等)研修

### 第3回 児童生徒等のための教材・教具とその活用法

田所 希衣子 先生(外国人の子ども・サポートの会)

今日は子どもの日本語学習と教科学習のコースデザインを考えるときに、知っておきたい、子ども一人一人の支援の必要度を表すステージとそのステージに応じた教材に焦点を当ててお話しします。今もいい教材がつつぎに公開されています。さまざまな教材の中から、実際に担当する子どもに適した教材を選ぶときに、参考にさせていただければと思います。

受講者のみなさんは、日本語担当教員、日本語教室のボランティアなど、いろいろな役割を持っていらっしゃると思います。今日は、みなさんのラインを揃えていくために、「日本語担当教師」の立場で考えていきたいと思います。資料③「外国人児童生徒受入れの手引(改訂版)」(文部科学省)第三章の図(P22)の中の「日本語担当教師」にあたります。 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm)

今日の研修の流れについて

#### I. 日本語指導のコースデザイン

[\(1\) コースデザインのための基礎知識](#)

[\(2\) 5つのプログラムと教材・教具](#)

[\(3\) コースデザインを考えるための準備](#)

#### II. 生徒の情報からコースデザインを考える

[\(1\) 「外国人児童生徒受け入れの手引き」の例](#)

[\(2\) 実習予定の生徒の情報をもとにコースデザインを考える](#)

#### III. 児童生徒等の将来と進路指導

Iでは、「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」が示している「日本語の能力に応じた指導プログラム例」をもとに、子どもの支援の必要性の度合いを示す「ステージ1～6」と、それぞれのステージのプログラム例と教材例を調べます。IIでは、いろいろな背景を持っている生徒の情報を基に、どのようなコースをデザインするといいか、考えてみます。IIIでは、1回目の研修で市瀬先生が触れられた『外国籍児童生徒サポート事例集 多文化な子どもたちの未来をひらく』に関して、みなさんの質問にお答えしながら「外国人の子ども・サポートの会」の活動の話と子どもたちの進路支援をどのように考えるかをお話ししたいと思います。

今日の主な参考資料です。

#### <主な参考資料>

##### ① 「日本語の能力に応じた指導プログラム例」

<http://data.casta-net.jp/kyouzai/shidou/shidou-program-rei.pdf>

【作成】日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議

##### ② 「学習目標例」

<http://data.casta-net.jp/kyouzai/shidou/mokuhyou-rei-syoki.pdf>

【作成】日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議

##### ③ 「外国人児童生徒の受入れの手引(改訂版)」第3章日本語指導担当教師の役割

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm)

【作成】文部科学省

#### I. 日本語指導のコースデザイン

##### I - (1) コースデザインのための基礎知識

「外国人の子ども・サポートの会」を15年前に始めたころは、上記のような資料や情報がありませんでした。最近、語教育が次第に体系化されて、充実してきています。2、3年くらい前から、日本語担当の先生がいる学校が増えてきました。そして、子どもたちを長時間個別に指導してくれます。それまでは、子どもたちに関わる人の役割分担が明確ではありませんでした。これから「日本語担当教師」の役割を確認したいと思

ます。

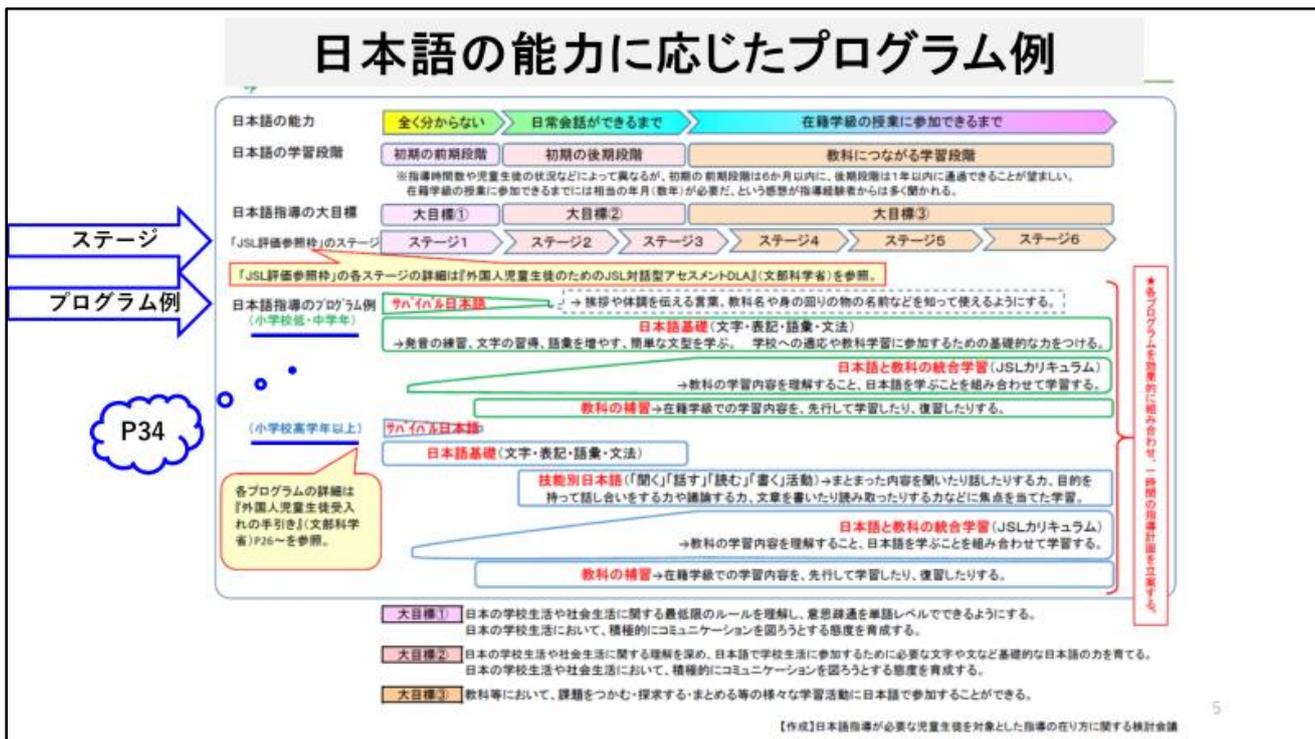
資料③「外国人児童生徒受入れの手引（改訂版）」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm)

第三章の図（P22）をご覧ください。まず、子どもたちがいて、家族がいます。それを取り巻いている近所のいろいろな人たちの中に日本語教室もあります。学校に行くと、校長先生、教頭先生のような管理職の先生がいます。主に外部との連絡をとる役割は教頭先生が担います。そして、日本語担当の先生、在籍クラスの担任の先生がいます。他に教務主任の先生、教科の先生がいます。子どもたちは、教室の授業で勉強したり、日本語教室で日本語を勉強したりします。日本語担当の先生が子どもと一対一で勉強するときは「入り込み」といって、子どもの隣に座って、授業の進行に沿って勉強します。また、「取り出し」というのは、教室以外のところで、日本語や授業に関係した内容を1対1で勉強します。

次に、子どもたちの日本語の段階と、それぞれのプログラム例を見てみましょう。

資料①「日本語の能力に応じたプログラム例」 <http://data.cast-net.jp/kyouzai/shidou/shidou-program-rei.pdf> をご覧ください。これは、「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」で作成したものです。全体像が見えるプログラム例として、ここに持ってきました。まず、一番上で『日本語の能力』を「全くわからない」「日常会話ができるまで」「在籍学級での授業に参加できるまで」に分けています。それぞれは『日本語の学習段階』として「初期の前期段階」「初期の後期段階」「教科につながる学習段階」と呼ばれます。また段階ごとに『日本語指導の大目標』1, 2, 3 が設けられています。その下の『ステージ』1～6は、「DLA 外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント」で設定された支援の必要度を表すステージです。



さらにその下の『日本語指導のプログラム例』を見ます。ここでは、「小学校低・中学年」と「小学校高学年以上」と二つに分けています。これは後で勉強する認知の発達段階に応じて分けています。これで見えていくと、「小学校低・中学年」では、＜サバイバル日本語＞＜日本語基礎＞＜日本語と教科の統合学習（JSLカリキュラム）＞をします。「小学校高学年以上」では、＜サバイバル日本語＞＜日本語基礎＞＜技能別日本語（話す、読む、書く、聴く）＞＜日本語と教科の統合学習（JSLカリキュラム）＞＜教科の補習＞という構成になっています。これがプログラムの考え方になります。

では、次の資料で上記の『日本語指導のプログラム例』と「DLA アセスメント」で設定した支援の必要度を表す『ステージ』1～6の関係をみましょう。

資料②「学習目標例」（日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議作成）

<http://data.casta-net.jp/kyouzai/shidou/mokuhyou-rei-syoki.pdf> をご覧ください。

「JSL 評価参照枠」		「個別の指導計画」の 学習目標項目の段階	『外国人児童生徒受入れの手引き』 の日本語プログラム
ステ ージ	学齢期の子ども在籍学級参加との関係		
1	学校生活に必要な日本語の習得が始まる。	初期指導 (前期)	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む。	初期指導 (後期)	
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる。	教科につながる 初歩的な学習	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる。	教科につながる 基礎的な学習	
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる。	教科につながる 学習	
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる。	教科学習	

P1のこの表は、資料①で見た『ステージ』1～6 (DLA アセスメン) と『学習目標項目の段階』と『日本語指導のプログラム例』(「外国人児童生徒受け入れの手引き」) の関係を表しています。

ステージ1～6が縦に書いてあります。ステージ1は、学校生活に必要な日本語の習得が始まり、少しずつ日本語に慣れていく段階です。ほとんどの子どもたちは聞いているだけで、話すことはまだ無理です。この時期に、黙ってしまう生徒もいます。私が出会った生徒で、全く学校で話さない小学2年生がいました。その子のお母さんは、家に帰っても辛そうだと言っていました。長い期間見ていると、その子は自分の国で非常に優秀だったことがわかりました。日本に来て、日本語が分からなくて、思うようにいかない。耳で聞いた日本語を自分の中に貯めている、それがその沈黙の時期だったと思います。そして、夏休みが終わって学校に戻ってきたときから、その子の日本語は劇的に変わっていきました。ステージ1とステージ2の途中まで、一見うまくいく子どもと、うまくいかない子どもたちがいますが、長い目で見ていくことが必要だと思います。

次の「支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む」というステージ2は、教材やサポートをしてくれる人の力を借りながら、習得が進んでいくレベルで、日本語の「初期指導の後期」に当たります。図の右側を見てください。この「初期指導の後期」は、<サバイバル日本語>が終わって<日本語基礎>がかなり進んできている時期に当たっています。

ステージ3は、「支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる」ステージです。学校の毎日のルーティンにだんだん慣れてきます。学校の学習で今はいろいろなグループ活動があります。それに部分的に参加できます。ここで「頑張ってるな」という態度が見えてきます。これが教科につながる初歩的な学習です。

ステージ4は、「日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる」ステージです。意見を求められたら、ある程度自分の意見が答えられるようになってきます。

今日みなさんといっしょに考えていくのは、ステージ1から4までです。図の右の『日本語指導のプログラム』でいくと、ステージ4は、<技能別日本語>も進んでいます。教科につなげていく日本語はかなり早くから始まっています。そして、<教科の補習>も進んでいます。この<教科の補習>は、日本語がわからない時期に母語ができる方が母語で指導すると有効です。

この資料②「学習目標例」のP2からは、話す、読む、書く、聴くの活動についてステージ1～6のそれぞれの「学習目標」と「指導のヒント」が書いてあります。プリントアウトして貼り合わせると、このような一覧表ができるので、時間があるときに作ってみてください。

次に、発達段階と言語習得状況と指導法を見てみましょう。

資料③の「外国人児童生徒受入れの手引(改訂版)」(文部科学省)第三章(P35)の「(3) 発達段階によるコ

## 言語習得状況の特徴と指導法 P35

発達段階	<言語習得の特徴>と<適した指導方法>
小学生・前半 (1～3年生程度)	<p>&lt;特徴&gt; 日常生活の日本語使用場面でシャワーのように自然な日本語を浴び、その表現を場面との関係で丸ごと覚える。</p> <p>&lt;指導方法&gt; 文法説明はあまり有効ではない。児童の生活に関連のある具体的な場面とともに日本語を聞き、その表現を繰り返し使って活動する経験を通して習得する。</p>
小学生・後半 (4～6年生程度)	<p>&lt;特徴&gt; 言語を分析する力が一定程度発達しており、具体的な場面での日本語使用例を聞いたり補助的な説明を受けたりして規則を理解することができる。</p> <p>&lt;指導方法&gt; 理解した日本語を実際の場面や興味のある内容に関連付けて使う経験を通して習得させる。</p>
中学生	<p>&lt;特徴&gt; 言語を分析する力や文法規則を応用して使用する力も発達しつつあり、用例と説明を受けて意味や規則を理解することができる。</p> <p>&lt;指導方法&gt; 理解した日本語を状況に合わせて使用する練習を通して運用力を高める</p>

今まで見てきたのは、来日してからの時間の経過によるコース設計です。これから見るのは、子どもたちの発達段階に応じた指導方法を比べていきます。3つに分けてありますね。「小学生・前半」は10歳くらいまでで、だいたい1年～3年生くらいです。「小学生・後半」が4年生から6年生程度。そして「中学生」です。

最初に「小学生・前半」です。前回伊東先生と勉強したと思いますが、だいたい小学校3年生くらい、9歳10歳くらいまでは世界中の子どもが自然に言葉を習得していきます。ですから、日本に来た外国の子どもたちも、この時期は、かなり自然な状態で日本語を習得していきます。日本語使用場面でシャワーのように自然に日本語を浴び、それをその場で丸ごと覚えていくというのが特徴です。私の出会った低学年の子どもたちは、見事にスポンジのように吸い取って、言葉を覚えていきました。私たちが教えたことよりも、クラスの中で友だちといっしょにいて、そこで覚えた言葉を先に覚えていくんですね。

みなさんも経験されていると思いますが、子どもたちの言葉の覚え方は、段階によって違ってきます。来日して5カ月の小学2年生の子どもが私の前で絵を描きました。教室のようすの再現でした。真ん中に担任の先生が立っていて、左手に指し棒、右手に黒板消しを持っています。後ろの黒板には字が書いてあります。左右には掲示物があって、先生の前には机があって、友だちが座っている。体育着の袋や体育ぼうしも書いてあります。その事細かな描写が、まるで写真のようなんです。その子が言葉を覚えていくのも、そのように覚えていくようでした。大人が覚えていく方法とぜんぜん違います。ですから、言葉の指導方法も大人とは違ってきます。文法説明はまったく有効ではないです。文法の説明をすればするほど、子どもたちは分からなくなっていきます。ですから、余計な説明はできるだけしません。10歳くらいまでの子どもは、その場に合った適切な表現を聞くと、経験を通して習得していきます。ですから、学校の授業は最適です。特に小学校1年生はできるだけ取り出しをしないで、教室の中でみんなといっしょにいる。そうすると子どもたちにとって安心感もあるし、いろいろな場面で覚えていくことができます。ただ、2年生になると少し違うんです。1年生の場合は、ひらがなの練習、カタカナの練習、全てを先生といっしょにします。でも2年生になって来日した子どもたちにはそういうのがないわけです。ですから2年生で来日した子どもには、できるだけ取り出しの時間も作って、文字の練習をしたり、いろいろな補習をしていく必要があります。

さて次に、「小学生・後半」ですけれども、「言語を分析する力が一定程度発達」と書いてあります。4年生になると母語の語彙が増えます。日本語の語彙も増えていくことが、日本語の学習の大きなポイントになってきます。5年生くらいになると、私たちが質問したときに答えるその答えの質が変わってきます。成長したなと感心するときがあります。中国出身の男の子が、グループ活動の途中で「こういうとき、何もできない、バカになった気持ち。」と私に小声で言いました。思うままに言葉で自分の考えを表現できなくて悔しそうでした。そして特徴のところに「具体的な場面での日本語使用例を聞いたり」と書いてありますが、高学年でも具

体的というのは大切です。

それに対して、次の「中学生」の場合は具体的でないことがらでも「用例と説明を受けて意味や規則を理解することができる」。ここが小学生から中学生になると違ってきます。

私たちが子どもたちの日本語学習をサポートする際に気を付けるところは、子どもの年齢によって適した指導方法が違うことです。以前「外国人の子ども・サポートの会」の研修会で、高校生・大学生が後輩に自分の体験を伝える研修をしたことがあります。そのとき、小学生・中学生のときに来日した生徒たちに「どうやって日本語を覚えましたか？」と質問したら、全員「日本語は耳で覚えました」と言いました。小学生と中学生の違いは、その後なんです。中学生は、耳で覚えた日本語を「整理した」と言うんです。一人の生徒はノートを持ってきて、「私はこういうふうに整理しました」と言ってノートを見せてくれました。他の生徒は、「単語カードを作りました」というふうに、それぞれいろんな方法を持っているんです。

最初、私たちは勘違いをしました。そういう方法を小学生・中学生にできるだけ効率よく、こういうふうにしてしようって教えようとしたんですね。でも、後で気づきました。子どもたちは体験をしていきます。その間に、得たものを整理していく方法を自分で見つけていくんです。そして中学生になると、自分に合った方法を確立していきます。ですから、中学生の場合は、整理したりまとめたりする方法を自分で獲得していく力をサポートすることが必要だと気づきました。小学生の場合は、自分の言葉の学びを頭の中で整理する方法を少しずつ練習していくと、考える力をつけていくことにつながるんだと思いました。

### I - (2) 5つのプログラムと教材・教具

さて、次に5つの『日本語指導のプログラム』と具体的な教材を考えていきたいと思います。

資料③「外国人児童生徒受入れの手引（改訂版）」（文部科学省）第三章（P34）の「図3-3：コース設計プログラムの組み合わせ例」を見てください。

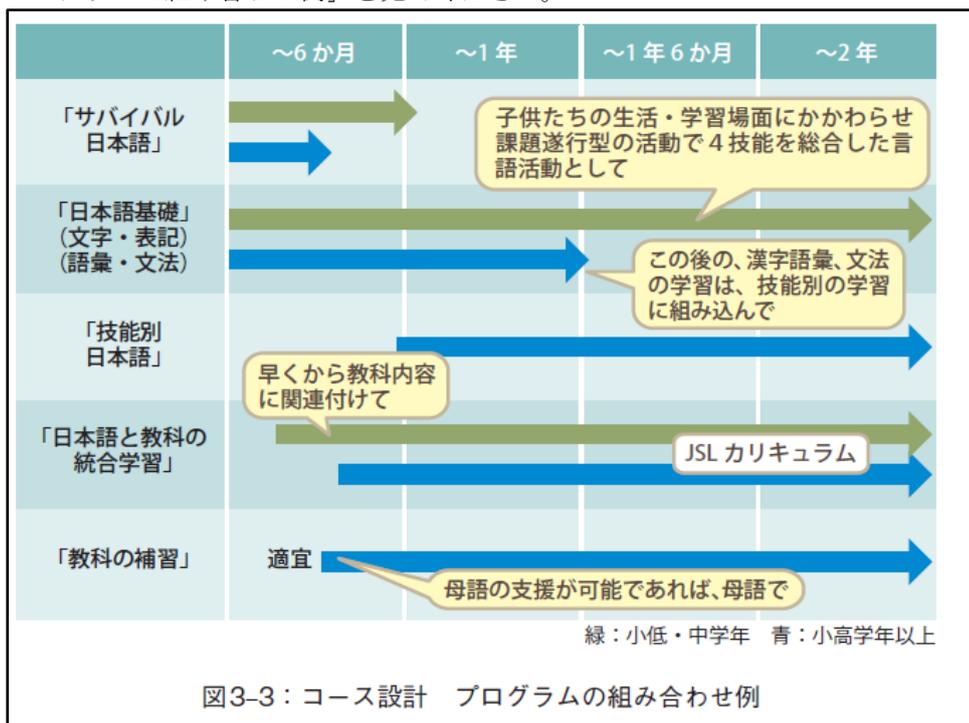


図3-3：コース設計 プログラムの組み合わせ例

I - (1) で、P34の5つの『日本語指導のプログラム』には<サバイバル日本語><日本語基礎><技能別日本語><日本語と教科の統合学習><教科の補習>があるのを見ました。では、そのプログラムでどのような教材が使えるのでしょうか。

#### <サバイバル日本語>の教材

来日してから、低学年の場合だと6、7ヵ月くらい、高学年は2、3ヵ月で<サバイバル日本語>は終了します。P28を見てください。ここに、<サバイバル日本語>の指導例があります。まず、健康、衛生に関して、それから安全に関して、それから友だちとの関係づくり、あいさつ、それから学校生活の教科の名前、教

室、「～を持ってきてください」「忘れました」、掃除、給食、遠足などがあります。

教材を手に入れるには、書籍を買うのとインターネットからダウンロードの二つの方法があります。私自身は、どこでもいつでも手に入るダウンロード教材をできるだけ使ってきました。その中から使いやすいものを紹介していきたいと思います。

みなさんの資料のところに『サバイバルカード』があります。これは「札幌子ども日本語クラブ」が作成しました。1枚目のカードの絵の横に日、中、韓、ロ、英、ポ、スの7言語で「トイレに行きたいです」と書いてあります。2枚目には「からだのぐあいがわるいです。」と書いてあります。全部で5枚あります。これを生徒と先生に持ってもらいます。まだ日本語がまったくわからない時期に、例えば、生徒がトイレに行きたいときに、先生がカードを見せて、生徒が「これっ。」と指さしたら「はい、トイレ、どうぞ。」というふうに使えます。あるいは生徒が自分で、このカードを見せて「トイレに行きたい。」と伝えることができます。

- 『サバイバルカード』(札幌子ども日本語クラブ) <https://sknc.skr.jp/wp-content/uploads/2020/02/survivalcard.pdf>

日本語の学習の初日に、私は数字の読みと自己紹介ができるように練習します。小学2年生は1～10ぐらいまで。小学3年生になると、1日目に1から100まで言えるようになります。自己紹介もフォームを使うとできるようになります。それをすることによって、「あ、できた。数字が言える。自己紹介が言える」という自信が持てるようになります。いつかまた別の機会にそういうやり方を説明できたらと思います。そして数に関しては、1個、2個、ひとつ、ふたつとありますけれども、いち、に、さん、し(よん)を基準にして、例えば8月3日は「はちがつ さんにち」、8月4日は「はちがつ よんにち」でいいと思います。後で、だんだん「みっか」とか「よっか」とか覚えていけばいいと思います。

文字に関しては、中国や韓国の子どもたちは日本人の子どもたちと同じように文字で覚えるのが得意です。でも、いろいろな国から来る子どもたちの中には、ひらがなを見ただけで「ちょっともういいです。」って思う子どももいます。そういう子どもたちは、耳で「あいうえお」を聞いて練習していきます。小学1年生の教科書に必ずあるのが、口の形の写真とひらがなの「あいうえお」です。これをいっしょに見ながら、「あいうえお」といっしょに発音します。「あいうえお」に慣れたら、「かきくけこ」「さしすせそ」と、みんな同じ口の開け方で発音することを、繰り返していきます。

同様に1年生の教科書に「あいうえおのうた」というものもあります。これはとてもリズムがいいんです。「ありのこ あちこち あいうえお、 いしころ いろいろ あいうえお」って。小学校低学年はこれを使って、椅子取りゲームもできます。椅子を一つ足りなくしておいて、「ありのこ あちこち あいうえお」って一緒に歌いながら歩いて、歌がストップしたらそこに座るといふふうにします。そのうち私が抜けても、子どもたちだけで続けられます。ただ、それは子どもたちが複数いる場合ですね。一人だけの場合のときは、これを見ながら一緒に手をたたきながら歌うとか、できるだけ体のどこかを動かしながらやるといいと思います。

「あいうえお」の点つなぎもあります。あいうえおの点を順番に探してつないでいきます。数字もあります。これは、幼児教育のHPからダウンロードできます。

- 「ちびむすドリル」 <https://happyililac.net/kisetsu-sozai.html>

知育遊び「子育てわあるど」というHPには、『ひらがなしりとりカード』があります。手のひらに入るくらい大きさのカードです。このカードを切ってノリで貼ってつなげてあげると小さなカードの本になります。これが筆箱に入るので、これを「いつでも練習してみようね」と渡します。

- 「子育てわあるど」 <http://www.sakunet.ne.jp/~hayaka1/aisatu.html>  
→「親子で楽しめるゲームあそび」

これは公文の市販の『ひらがなカード』『カタカナカード』です。勉強の合間など、これを机の上に置いておくとも子どもたちがパタンパタンと自分で読む練習をします。それから、「大人、子ども」「止まる、動く」「大きい、小さい」のような反対語が集まっている『反対語カード』や『文カード』があります。このカードには漢字の表記もありますが、まだ漢字が読める段階ではないので、私は漢字にフリガナをつけて使っています。

- 『ひらがなことばカード』『カタカナことばカード』『反対ことばカード』 くもん出版

ひらがな、カタカナの練習教材は、「JYLプロジェクト」のHPからダウンロードできます。会話の教材も入っています。小学生用、中学生用と分かれているものもあります。ひらがな練習帳は、カラーで印刷すると子どもたちが喜んでやります。

- (JYLプロジェクトの日本語ライブラリ) <http://www.kodomo-kotoba.info/>

文字の練習で気を付けることは、1年生からしっかり覚えていく子どもたちは、ひらがなの筆順を日本の子

どもたちと同じように覚えるといいのですが、大きくなって来た子どもたちは、大きく間違っていなければ、きれいに書く、ていねいに書くということといい私は思っています。そして、文字を1個1個練習した後は、必ず言葉として練習していくことです。できるだけ身近な言葉から音と意味と文字をいっしょに覚えていきます。

初期指導の教材として、ぜひみなさんにご紹介したいのが、『たのしいがっこう』（東京都教育委員会）です。先生方が編集したもので、学校に必要な日本語が書いてあります。この教材のいいところは、22言語対訳です。ネパール語、ペルシャ語、ロシア語などもあります。そしてこれを使うことができるのは、母語で読み書きがある程度できる子どもたちです。対訳が母語で書いてあるので、自分の母語で読み書きができない子どもたちには、わかりません。母語の字が読める子どもたちは、母語の言葉と、ひらがなで書いた日本語の対比ができます。そして、ひらがながまだ読めない子どもには、アルファベットで書いてあげるのもいいと思います。ローマ字で日本語の読み方を厳密に書こうとすると、表記がいろいろ複雑なので、それにはあまりこだわらないで、この段階では子どもたちに伝わればいいと考えてください。さて、『たのしいがっこう』を見ていくと、あいさつ、体の調子、それから頼むとき、たずねるとき、学校の行き帰りの安全、そして、仲よく遊ぶ、持ち物などが扱われています。全部をやる必要はありません。必要な所を選んでやればいいと思います。

●『たのしいがっこう』（東京都教育委員会）

[http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/school/document/japanese/tanoshi\\_gakko.html](http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/school/document/japanese/tanoshi_gakko.html)

そして、『たのしいがっこう』と併用していくといいのが、市販の『日本語学級1、2』です。著者は『日本語学級1』を、だいたい来日から1ヵ月で終了することを勧めています。週に何回学習するかで期間は違うと思いますが、あまり長い期間使いません。半分はひらがなの練習とカタカナの練習ですから、実際の内容は半分です。この本の特徴は、まず1語、2語でコミュニケーションしましょうというのです。だから、「いい、だめ」「ある、ない」などの練習です。ページをめくっていくと絵が描いてあって、絵を見るとどういう状況か一目でわかるようになります。そこで使われている「いい・だめ」を子どもたちが絵を見て判断して練習します。練習の仕方としては、モデルをいっぱい聞かせてあげることをお勧めします。例えば、問題ごとに「いい？だめ？」というふうにこちらから質問します。子どもたちは「いい」「だめ」と何回も聞くことになってきます。最初は、うんとかうんとか首を振っているんですけども、だんだん「いい」「だめ」と言えるようになってきます。覚える、覚えないうちは、こだわらなくていいです。楽しくどんどんスピードをつけてください。そして、その後『日本語学級2』に進みます。『日本語学級2』では文が出てきます。一番最初の課では、大人の日本語と違って、学校と関わりがある表現から入っていきます。例えば、黒板で計算した答えが「1+1=3」と書いてあります。それを見て「3ではありません、2です。」と練習します。これも同じようにコミュニケーションの練習ですから、だいたい6ヵ月くらいで終わらせていきます。そして先ほどお話ししたように、覚える、覚えないうちにこだわらなくていいです。先に口頭でたくさん練習して、それに慣れたら、まとめとして書く練習をします。

●『日本語学級1、2』波多野ファミリースクール 大蔵守久（凡人社）

## <日本語基礎（文字表記、語彙、文法）>の教材

低学年の場合は、<サバイバル日本語>と<日本語基礎>を1年半から2年くらいまで続けます。

高学年の場合は、<日本語基礎>をだいたい1年2、3ヵ月くらいまでで終了して、<技能別日本語>に移行していきます。日本語の勉強を始めて1年半から2年くらい経つと、日常会話だけでなく授業の先生の話が分かるようになってきます。子どもたちにとってとても嬉しいステージです。

コミュニケーションの練習として『日本語学級2』は、<サバイバル日本語>から<日本語基礎>に引き続き使っていきます。

漢字に関しては、「東京外国語大学多言語多文化共生センター」の漢字ダウンロード教材があります。1年生から、3年生まであって、きれいなカラー教材です。算数の教材も入っています。この特徴というのは、最初の導入の次に「読めるかな」「書けるかな」などいろいろなドリルが入っているので、漢字だけでなく、問題の読み方の練習にもなるので、私はこれをよく使います。多言語版ですが、すべての子どもに使えます。

●「外国につながる子どものための教材」（東京外国語大学多言語多文化共生センター）

<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/social.html>

（ポルトガル、タガログ、スペイン、ベトナム、タイ語版）

漢字教材はもう一つ、市販の『かんじだいすき』（1～6年生）があります。中を見ると、とても丁寧な内容になっています。ただ、これを個人で買うのは大変かもしれません。

●『かんじだいすき（1年～6年）』 AJALT 国際日本語普及協会

語彙に関しては、愛知教育大学の『図形を学ぼう』というダウンロード教材があります。「どれが一番長い」「真っ直ぐ」「真っすぐじゃない」とか、「ここに写す」「形を写す」「分ける」「集める」など、図形を通して日本語を勉強していく教材です。これは「愛知教育大学 外国人児童生徒支援 リソースルーム」から、ダウンロードできます。このほかにも、ひらがな教材、カタカナ教材、漢字教材、いろいろあります。

- 『図形を学ぼう』 [http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/kyozai\\_sansu/zukei.pdf](http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/kyozai_sansu/zukei.pdf)  
 (愛知教育大学 外国人児童生徒支援 リソースルーム)  
<http://www.resource-room.aichi-edu.ac.jp/kyozai.html>

自分で語彙の教材を作ることもできます。これは担任の先生の許可を得て、対象の生徒の教室、その学校の様子を写真に撮って作っていくと、とても効果的だと思います。こういう具体的なものは<サバイバル日本語>のときから使うといいと思います。様々な学校の場面の語彙を増やしていくことも大切です。



文法の指導例として、資料③「外国人児童生徒受入れの手引（改訂版）」（文部科学省）第三章（P30）に、「文型指導の例」があります。これを見ていくと、小学校の低学年と 高学年と分けて考えています。これは認知の発達によるものです。例えば、「～があります」の文ですけれども、低学年の場合はゲームの形で進めます。繰り返し練習した後で、まとめとして書く作業をしています。高学年の場合は、ものと場所のカードを作ります。それを組み合わせて、黒板で文型を提示します。それから繰り返し練習をします。その後、応用として、AさんとBさんが背中合わせになって、Aさんが組んだカードを読み上げて、それをBさんが自分の前で再現します。その答え合わせをして、最後にそれを文章に書きます。そのようにそれぞれの発達段階で、指導が違ってくると書いてあります。

○文型指導の例

「～に～があります(存在文)」

小学校前半 (1～3年生)	小学校後半 (4～6年生)・中学生
<p>①導入 グラウンドの絵に、鉄棒、ブランコ、滑り台、砂場のカードを置いておき、それぞれについて、場所と物の語彙を確認する。 絵の該当する箇所を指示しながら、口頭で「グラウンドに鉄棒があります。」と文型を導入する。</p>	<p>①導入 机の絵を板書し、その上(下、中)に、「かばん、上靴、ノート、筆箱」のカードを貼り付けておき、指さしやジェスチャーを加えながら「机の上にノートがあります」と文型を導入し、板書する。</p>
<p>②練習 ・導入した文型を、絵で意味を確認しながら繰り返し発話する。 「公園にブランコがあります。」 「中庭に砂場があります。」 ・公園、グラウンド、中庭の絵の上に遊具カードを裏返しておいて、何があるのかを当てるクイズを行う。 A：公園に何がありますか。 B：鉄棒があります。 A：(カードをめくって)いいえ、ちがいます。公園に、砂場があります。 ※最初は教師が出題し、次に児童生徒に出題させる。</p> <p>③まとめ 最後のクイズの内容を「～に～があります」という文型を利用して書き(2～3文)、その後、つくった文を読む。</p>	<p>②練習(基本練習) A：教師の発話のリピート練習 B：黒板の絵を見ながら、文の下線の個所を他の語彙に入れ替える練習「机の上<u>に</u>本があります」 C：自分で文をつくる練習 D：Q&amp;A練習 Q：机の中に何がありますか A：机の中に筆箱があります。</p> <p>③練習(応用練習) A、Bのペアになり、背中あわせに座る。Aは、机と机の絵に「かばん、教科書、時計、ノート、筆箱」のカードを置いて絵を完成する。そして、Bに、文型を利用して絵の説明をする。Bは、Aの話のとおり、自分の絵にカードを置く。最後に、二人で完成した絵を見せあいながら、答え合わせをする。次はBが、問題をつくる。</p> <p>④まとめ 応用練習でつくった絵について、文型を利用して文を書く。出だし「ここは〇〇さんの部屋です。」に続けて書かせる(絵の物すべてについての文)。最後に、類似の文章を読んで部屋の絵を完成させる。</p>

文型の練習のダウンロード教材として、『日本語学級2』の後に『みえこさんのにほんごれんしゅうちょう2』を使うと、日本語の知識を整理できると思います。『れんしゅうちょう1』は、文字の練習帳です。これは三重県教育委員会を出しています。テキストと練習帳が組になっています。教科の勉強が並行する時期になると、日本語の教材を最初から最後まで順番に学習するというより、必要なところを選んで使うといいと思います。ダウンロード教材の中に絵カードもあります。

●『みえこさんのにほんご』『みえこさんのにほんごれんしゅうちょう2』  
(三重県教育委員会) <http://www.pref.mie.lg.jp/GAKOKYO/HP/27461025557.htm>

中学生の場合は、『日本語学級2』の後に、兵庫県芦屋国際中等教育学校で作った『中学生の日本語1, 2, 3』があります。中学校生活を文例にしています。この教材も最初から順番に学習すると長時間かかりますから、生徒の日本語のようすを見て、動詞、形容詞の活用、ふつう体の文型練習、「～と思います」「～と言います」「～たら」「～れば」など必要だなと思ったら、選んで練習すると思います。この教材は「兵庫県教育委員会子ども多文化共生センター」のHPからダウンロードできます。ほかにもたくさんの情報があります。

●『中学生の日本語1, 2, 3』(兵庫県教育委員会子ども多文化共生センター)  
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~mc-center/nihongosidou/kyouzai/kyouzai.html>

<技能別日本語>の教材

プログラム「技能別日本語」の土台となる漢字の学習ですが、学習方法はいろいろあると思います。私は、ステージ1、ステージ2の時期に小学校1年生と2年生の漢字の練習をします。そのときに、画数を「1, 2, 3・・・」といっしょに言いながら書きます。上から下に書く、左から右に書くという書き順の基本のルールも確かめます。その期間に漢字の基本的なルールを練習しておく、漢字の書き方に手と頭が慣れていきます。そして、1年生2年生の漢字が終わったら5年生なら5年生の学年の漢字にとりくみます。一つ一つの漢字の書き順が正確でなくても、基本の漢字の書き方に手と頭が慣れていっていると、新しい漢字を見ただけで書き方がわかるようになります。それから、漢字ノートを作って、自分で勉強した漢字を書きためて、語彙を増やしていくといいですね。特に数学の用語は繰り返し出てくるので、自分の辞書のようにノートを作ると役立ちます。

読む力に関しては、私は「サバイバル日本語」から『日本語学級2』でコミュニケーションの練習をしながら、合間に『ひろこさんのたのしいにほんご』の中の文章を読むようにしています。かなり早い時期からまとまった文章に少しずつ取り組んでいくといいと思います。『ひろこさんのたのしいにほんご』も全部ではなく、必要な所を選びながら進めていくといいと思います。『ひろこさんのたのしいにほんご』は市販の日本語テキストですが、HPから文字や文型練習の教材をダウンロードできます。『ひろこさんのたのしいにほんご』を読み上げた音声教材もあります。

- 『ひろこさんのたのしいにほんご』 凡人社（市販）
- 「ひろこさんのたのしいにほんご」のHP（練習帳、音声教材など）<http://hirokosan-onsei.moo.jp/>

読む力をさらにつけるには、市販の『なぜ？ どうして？ 科学のお話 2年生』があります。2年生を選んだ理由は、ひらがなが漢字についているからです。まだ漢字が読めない生徒も読めることと、内容が科学なので、物語ではない説明文の導入としておもしろいと思います。興味をもっていることについて読みを広げると、本の世界が広がります。

- 『なぜ？ どうして？ 科学のお話シリーズ』（大山光晴著 学研）

書く力に関しては、これは、私が自分で作っている書写シートです。書写は、モデル文を見て写す作業です。作文の力をつけるために有効な練習だと思えます。その日に勉強した文を、字体は教科書体14か16フォントの大きい文字のシートにして宿題にします。生徒が隣のスペースに書き写すのを続けていきます。それから、1週間の日記です。右側に小さい四角があるのはハンコを押すところです。担任の先生に見ましたってハンコを押してもらいます。ただ気をつけなければいけないのは、毎日、「今日ごはんを食べて、学校に行きました。」「今日もごはんを食べて、学校に行きました。」と同じ文で終わってしまうことがあるので、それは工夫してあげてください。そして最初は1行、次は2行、3行というふうに、だんだん増やしていきます。

書写シート			
あげました。	ぼくは いもうとに 本を よんで	ひいて、 学校を 休みました。	わたしは きょう うちで つたいを しました。

日記用紙	
月 日	<input type="checkbox"/>

作文に関しては、ひらがな、カタカナ教材のところでもご紹介しましたが、「JYLプロジェクトこどもの日本語ライブラリ」の『自分のことノート』を使っています。小学生高学年用と中学生用がダウンロードできます。まずモデルの文章が書いてあります。それについていろいろな問かけがあって、最後に自分のことを書くというように段階を追っています。特に、中学3年の受験の子どもたちに必ず使います。これを読んで書くことによって、面接や作文の下書きを準備することができます。

- 『自分のことノート』（JYLプロジェクトこどもの日本語ライブラリ）  
[http://www.kodomo-kotoba.info/booklet/basicsearch\\_booklet\\_05.html](http://www.kodomo-kotoba.info/booklet/basicsearch_booklet_05.html)

## <日本語と教科の統合学習>の教材

教科の学習との関連は<サバイバル日本語>の時期から始まっています。

私は日本語と並行して、小学生だったら算数、中学生だったら数学の教科書を読む練習を始めていきます。教科書を読む練習には算数と数学の教科書が適していると思います。一つの単元の中で用語が繰り返し使われているからです。はじめは読めない漢字に振り仮名をつけながら、音読だけを繰り返していきます。意味は全然わかりません。でも、それを繰り返していくうちに、「この漢字、前出てきたなあ」って思い出すんですね。そのときから子どもたちの発見が始まります。読める漢字が増えてきたら、教科書のイラストや図や式と意味をつなげていくことができます。今までその練習をした子どもたちはほとんど1年かからないで教科書が読めるようになっていきました。最初は砂漠に水を撒くような思いで始めるんですが、繰り返しが、それを可能にしていきます。例えば「表す」が読めないとき、私が「あらわす。」と読んで、白い紙に「あらわ(す)」と書きます。生徒がそれを見て、教科書に「あらわ」と書き込んで、「あらわす。」と音読します。「表す」の漢字一つについて生徒は聞く、見る、写す、そして読みます。その4重の作業が記憶に役立っていると思っています。

「JSLカリキュラム」の名前を聞いたことがあると思います。10年くらい前に、私たちも一生懸命この勉強をしました。量が多くて難しかったですが、その基本の考え方は<日本語と教科の統合学習>のベースになっています。「JSLカリキュラム」は文部科学省のHPに詳しく書いてあります。その大切な所を確認しておきたいと思います。また、スリーエーネットワークから国語、算数、理科、社会のJSLの授業作りの本も出ています。

<日本語と教科の統合学習>は、「内容を重視した日本語教育」のプログラムでもあります。「内容を重視した」というのは、文型や表現を勉強して、それを使って何ができるようになるのか、学校の中でみんなといっしょにどんな活動ができるのか、そういう内容につなげていくための日本語学習です。HPの中には低学年の「買い物ごっこ」が例として載っています。生活科でも商店の勉強をするので、在籍クラスの勉強にもつなげていけます。これが活動のアウトラインです。

<p><b>日本語と教科の統合学習=内容を重視した学習プログラム</b> 授業や活動の中で「日本語を使って〇〇ができるようになった」</p> <p>①授業「買い物ごっこ」を例に</p> <table border="1"> <tr> <td data-bbox="137 1144 432 1361"> <p><b>子どもの実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・半年前に来日した2学年の子ども</li> <li>・日常会話ができる</li> <li>・授業中はついていけない</li> <li>・自分で考えて決められない</li> <li>・目の前のことしか理解できないし、伝えられない</li> <li>・学年相当の計算力はある</li> <li>・読み書きはかなり困難</li> </ul> </td> <td data-bbox="440 1144 766 1361"> <p><b>教師・指導者の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・買い物をしたことを話したが、うまく伝わらなかった…興味・関心</li> <li>・来月生活科で商店の勉強をする…在籍クラスでの学習</li> <li>・分からないことは聞いて、自分で判断できるようにさせたい…学び方</li> </ul> </td> </tr> </table> <p><a href="http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/002.htm#contentsStart">http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/002.htm#contentsStart</a></p>	<p><b>子どもの実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・半年前に来日した2学年の子ども</li> <li>・日常会話ができる</li> <li>・授業中はついていけない</li> <li>・自分で考えて決められない</li> <li>・目の前のことしか理解できないし、伝えられない</li> <li>・学年相当の計算力はある</li> <li>・読み書きはかなり困難</li> </ul>	<p><b>教師・指導者の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・買い物をしたことを話したが、うまく伝わらなかった…興味・関心</li> <li>・来月生活科で商店の勉強をする…在籍クラスでの学習</li> <li>・分からないことは聞いて、自分で判断できるようにさせたい…学び方</li> </ul>	<p>②トピックを決定、学習活動とアウトラインを決定</p> <p>テーマ：「金」 トピック：「買い物ごっこ」</p> <p>学習活動： 買い物の経験について話し、それぞれの商店の商品や買い物の仕方を思い出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それをもとに買い物ごっこの準備をする。</li> <li>・持っているお金で何が買えるか考え、自分で判断して欲しいものを買う。</li> </ul> <p>アウトライン：</p> <p>買い物の経験を問う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→商店の名称と商品、お金の払い方について確認する</li> <li>→買い物ごっこの準備をする</li> <li>→買い物ごっこをする（値段を聞いて買うかどうか判断する）</li> <li>→買ったものや売ったものを発表する</li> </ul> <p><a href="http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/002.htm#contentsStart">http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/002.htm#contentsStart</a></p>
<p><b>子どもの実態</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・半年前に来日した2学年の子ども</li> <li>・日常会話ができる</li> <li>・授業中はついていけない</li> <li>・自分で考えて決められない</li> <li>・目の前のことしか理解できないし、伝えられない</li> <li>・学年相当の計算力はある</li> <li>・読み書きはかなり困難</li> </ul>	<p><b>教師・指導者の視点</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・買い物をしたことを話したが、うまく伝わらなかった…興味・関心</li> <li>・来月生活科で商店の勉強をする…在籍クラスでの学習</li> <li>・分からないことは聞いて、自分で判断できるようにさせたい…学び方</li> </ul>		

また、「JSLカリキュラム」のHPには「AUカード」というのがあります。これは、日本語の表現が分解されてカードになっています。目的に合わせてカードを選んで、組み合わせで授業に活用するものです。この「買い物ごっこ」の活動では、「～を買ったことがありますか?」「はい。～で、～を買いました」「～はいくらですか?」「何を買いますか?」このような日本語表現が言えるようになるという目標で計画を立てて、語彙の確認やQ&Aの練習を組み立てていきます。

●『JSLカリキュラム』小学校編、中学校編（文部科学省）

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm)

さて、次に「JSLカリキュラム」のHPから離れて、実際に私がやっていた日本語と教科を結びつける活動をいくつか紹介します。

フィリピンから来た3人の兄妹が、年齢は違いますが、小学校6年生に同時に入りました。一番上のお兄さんが、スィーパという5円玉にひもを房状に結びつけたものを蹴る遊びをしていました。クラスの友だちもいっしょに遊んでいたのので、「スィーパの作り方をみんなに教える」という活動をしました。お兄さんの説明を聞いて、私もいっしょに4人でスィーパを実際に作った後で、その作り方を「はじめに、つぎに、それから、さいごに」の接続詞を使って、作文を書いてクラスの友だちに配りました。作って遊んだ友だちもいました。ただ、お金を蹴って遊ぶことに、日本の文化では違和感がある人がいると思います。

同じ書き方で、米の炊き方、好きなフィリピン料理のレシピも書きました。

また、「町を知って、町の説明をする」という活動をしました。住んでいる町の地図を使って、3人が行ったことのある場所についてようすやそこで何をしたかを書き出しました。それをもとに私が場所の説明文をPCで入力して、町のガイドブックを作りました。このように、日本語と国語や社会科に繋げていくのがJSLカリキュラムの考え方です。

### <教科の補習>

小学校高学年の<教科の補習>は、<サバイバル日本語>のころから始まっています。日本語だけでこれを進めていくのはかなり難しいことなので、特に<サバイバル日本語>の時期は、子どもの母語が話せる人が母語で進めるのが有効です。

<教科の補習>を何のためにするか、それは子どもが在籍学級の授業がわかるためです。補修の内容を自分で勝手にということでは、成果が上がりません。資料③「外国人児童生徒受入れの手引(改訂版)」(文部科学省)第三章(P32)に書いてありますが、「在籍学級の担任、教科担任の教師と相談して決定すること」がいちばん大切になってきます。

具体例ですが、これは取り出しの6年生の歴史の勉強です。日本の歴史の流れは、フィリピンから来た生徒にとって、とてもかけ離れたものです。それで、学校の図書室から日本の歴史の絵本を借りました。村がいくつもできて、王が生まれて、古墳ができたというページになっていますが、このページを大きく拡大して、そこに生徒が自分で、勉強したことを書き込みました。そして書き込んだ絵を並べて簡単な年表を作っていく作業をしました。学年が終わる

**しほう山** (274メートル)  
たかい山です。  
山元町と角田市と互理町が  
山の上からみえます。



これは **山元町** です。  
いったことが **ありますか?**

**うしばし こうえん**  
ここは、ひろい こうえん です。  
たのしい こうえん です。  
みんなで あそびましょう。



**かやの老樹**  
この木は、650さいです。  
とても ふるい木 です。



**しん山** (287メートル)  
たかい山です。  
山元町とうみが  
山の上からみえます。



**やちようの森**  
ここは、大きい森です。  
しずかな森です。  
いろいろなとりがいます。  
とりがなきます。  
とりのうたをききましょう。



**しんざん 少年の森**  
「じてんしゃを かしてください」  
じてんしゃを 山の中を  
はります。



**すいじんぬま**  
ふゆになると、しろいとりがきます。



**いそはま**  
ここは、きれいなうみです。  
およぎますか?

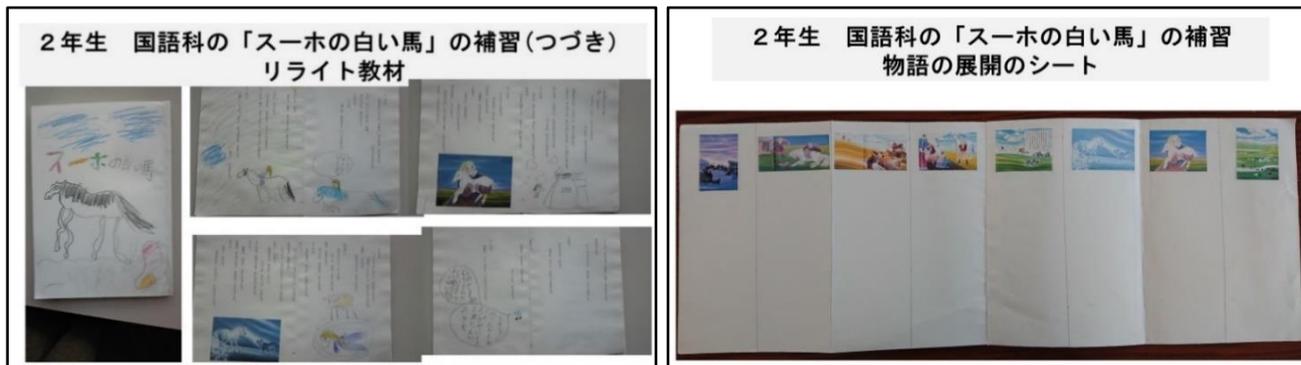






ころ、クラスの歴史の授業で一人一人が歴史の中の人物を選んで新聞を作る課題が出ました。この生徒は信長を選びました。取り出し授業で信長についていろいろ調べた後、クラスの授業で『信長新聞』を作りました。これは卒業文集に載りました。

また、国語では、物語文の『スーホの白い馬』（2年生）のリライト教材を使いました。準備として、教科書の本文を生徒の日本語レベルに合わせてリライトしました。教科書の挿絵も入れて、リライト教材を生徒用とモデル用に2冊用意しました。モデル用には、私が挿絵に吹き出しを書いて、こう言っているんだろうなどと想像した言葉を書き込んだり、登場人物が嬉しい場面では赤いシールを貼ったりして、「今からこれを使って、ここに言ったことを書いたり、気持ちのシールを貼りましょう。」と生徒に見せました。それから、教科書の挿絵をカードにして、横長の紙に順番に並べて貼った「物語のだんらくシート」も用意しました。



リライト教材を読みながら、言葉がわかるかどうか確かめて、分からないところは絵を描いたり、写真を見たりします。次に段落に分けて、挿絵に吹き出しをつけて言葉を書き込みました。登場人物の気持ちを考えて嬉しいときは赤、悲しいときは青のシールを貼りました。それから、「物語のだんらくシート」の挿絵の下に、誰が何をしたか書き出しました。そうやってゆっくり進めていきます。そのうち、その生徒が物語に合わせて、自分で絵を描き始めました。それぞれの場面を読んで、自分の頭の中にある絵を書いていきました。こちらが最後に書き上げた表紙になります。これで、『スーホの白い馬』の補習を終わりました。

説明文の『ビーバーの大工事』（2年生）のリライト教材では、語彙の画像教材を用意しました。例えば「ビーバーは木を切ります」というところは、ゴリゴリのこぎりで切るのではなく、歯で切ります。そして、これが「かじる」なんだとわかるようにします。また、「ビーバーの歯は、大きくて鋭い。それは大工さんの使うノミのようです。」の部分では大工さんとノミがわかるような補助の画像とリライト教材を読み合わせながら、進めていきます。まだ教科書の本文はとても読める状態ではないですが、これをすることによって、子どもが『ビーバーの大工事』をある程度理解することができました。今はインターネットで国語の単元のタイトルを検索すると、そのタイトルに関する副教材が出てきます。『ヤドカリとイソギンチャク』（4年生）の単位では、イソギンチャクがヤドカリの殻を乗り換える動画がありました。一目瞭然でした。



それから、宮沢賢治の『注文の多い料理店』（5年生）を読んだ後に、自分で不思議な世界に行く物語をつくるという活動があります。物語の設定、展開、山場、結末を自分で構成します。そのためには『注文の多い料理店』を読んだときに表をつくって設定、展開、山場、結末の構造を視覚化しておきます。絵が好きな生徒がホワイトボードで物語の展開にそって絵を描きました。そこに「展開」「山場」「結末」を書き込みました。不思議な国に入るときに風が吹いたこと、現実の世界に戻ったときにも風が吹いたことも書き込みました。その後、教科書の『不思議な世界にでかけよう』のモデルの物語を一回読みます。でも自分ではそうすぐにはできません。それで対話を通して、どういう話をつくるかを考えていきます。子どもたちと学習を進めていくときに、質問をすることがとても大切です。だれでも質問をされると必ず考えますね。なんとか答えようとします。それが大切で、私たちはできるだけ、答えられる質問を繰り返していきます。そして頭の中で何かが浮かんだようすが見えたら、次の活動に入っていきます。それはどこ？いつ？誰がいるの？と聞いて具体的な場所が出てきたら、紙を用意して絵を書くしぐさをして見せると、たいてい書き始めます。「誰がいる？」「何が見える？」「空は明るい？暗い？」と絵で設定を書き出していきます。そして次の活動でかいた絵をもとに自分の言葉で書いていきます。短くてもいいですし、そんなに不思議でなくても、不思議な世界に行って現実に戻ってくるお話が書けると、クラスで発表することができるし、文集にも載ります。このように、在籍クラスの授業で一人ではできないところを助けていくのが＜教科の補習＞になります。

さて、ここまでで 5つの『日本語のプログラム例』と教材を見て来ました。後半は、これからみなさんが出会う子どもたちにどのようなコースを考えていけばいいかを考えていく時間にしたいと思います。

### I - (3) コースデザインを考えるための準備

準備として、まず1番目に複数の教材を並べて、調べる、比べる作業をお勧めします。今日いくつか教材をご紹介しますが、その一つ一つがどんな内容で、どういう順番になっているのか、カタカナ、漢字はどのくらいあるかなどを調べて、自分のための一覧表を作ります。今回は＜サバイバル日本語＞のプログラムの部分で使う『たのしいがっこう』、『日本語学級 1、2』、『にほんごをまなぼう』を並べて、見比べてみます。例えば、『たのしいがっこう』の1課について、これが『日本語学級 1、2』だったら何課にあたるか、『にほんごをまなぼう』だったら何課にあたるかの一覧表を作ります。そして、一番左の欄に、ここでは自己紹介が出来る。ここでは体の調子が言える。ここでは友だちに消しゴムが借りられるというように、自分で工夫して、自分の資料を作っておくと、新しい教材が出てきたときには、その欄を増やしていけばすぐに使えます。時間があったらぜひやってみてください。

「たのしいがっこう」「日本語学級」「にほんごをまなぼう」を使った日本語初期指導例					
「外国人の子ども・サポートの会」					
テキスト以外の活動	「たのしい がっこう」各国語版 主テキストとして使用			「日本語学級 1、2」 必要に応じて練習として使用	「にほんごをまなぼう」 イラストを使用
	課	項目	アクティビティ	課	課
<数字、時間> ・1～99  <自分のことを話す> ・自己紹介	1. あいさつとへんじ	・あいさつ(友達、先生) ・名前を呼ぶとき ・わかったかどうか聞かれたときの返事 ・名前を聞かれたとき ・自己紹介	・あいさつカードで練習  ・自分を紹介のフォームを作る		1. おはよう  2. わたしのなまえ
<自分のことを話す> ・自己紹介(暗記練習) <語彙を増やす> ・「〇〇は/これは日本語で何ですか？」 <数字、時間> ・電話番号 ・100～1000	2. 体の調子	・体の調子を説明する  ・学校を休むときの連絡 電話のかけ方 手紙の書き方 ・保健室と保健室の先生 ・気持ちの表現	・体の部位の名前を覚える  ・体の不調を伝える ・電話の練習(ごく簡単に)  ・保健室に行ってみる ・「気持ちカード」ゲーム	1-25 「いたい」  1-26 「でんわ」	6. からだのこと  10. きょうはやすみます

それから次の準備としては、子どもの言葉の力を測る準備です。前回伊東先生がお話になったのは、DLAの語彙カード、タスクカード、読みのテキストですね。このほかに聞く、読む、書くのツールもあります。これの使い方はDLAの資料に詳しくまとめてあるので、それを見てみてください。

学校で子どもたちに会ったときに、子どもの日本語の力をどうやって測るか？ 私は、まず今勉強している国語と算数の教科書を持ってきてもらいます。「今どこを勉強しているの？」と聞いて、すぐに開いて見つけられるかどうか見ます。開いたら、「ここを読んでね。」と言って、1段落を読んでもらい、読み方を見ます。そして、「この中で分からない言葉がある？」と聞いて、どんな言葉が分からないか見ます。ある程度読める子どもの場合は、内容について質問をして、答えを聞きます。その後、まだ習っていないところの1段落を「ここを読んでね。」と言って、初見で音読してもらい、「この中で分からない言葉がある？」と聞いていきます。これは国語も算数も同じです。文字の拾い読みか、まとまりで読めるか。「これがわからない。」と指で指せるか、全体にわからないのか。どういう種類の言葉がわからないか、その割合がどれくらいか、そういうところを確認していきます。その後、「国語(算数)の勉強で、どんなときに困る？」と聞きます。それによって、その生徒がどんなところで困っているのか見えてきます。日本生まれの小学校低学年の子どもたちの場合は、DLA[はじめの一步]語彙カードを使います。「目」が答えられて、「まつげ」も答えられるかどうか。「口」と答えられて、「唇」が答えられるかどうか。「角」や「枝」など下位語を知っているのかどうかを調べます。日本語語彙の確認の後、お母さんに母語について調べてもらったことがあります。母語でも下位語を知らないことがわかって、お母さんが「こういう言葉を知らなかったんですね。」と認識したこともありました。

その次に、算数の計算力を測ります。足し算、引き算、かけ算、わり算、かけ算と割り算のひっ算の後、四則混合の問題をします。その後、分数の基礎の計算を見ます。小学校6年間の算数のどこで躓いているか、だいたいここでわかります。ここでできなかったところは、毎回の学習の中で、学年を戻ってもう一度ていねいに練習していきます。

②生徒の力を測るツールを準備する 小学校算数の計算チェック 単純に見えるけれど、計算力が見えてくる			
$45 + 51 =$	$254 + 47 - 38 =$	$\frac{1}{2} + \frac{1}{3} =$	$\frac{7}{9} - \frac{3}{6} =$
$32 \times 7 =$	$5 \times 6 \times 12 =$	$\frac{3}{8} \times \frac{4}{5} =$	$\frac{6}{7} \div \frac{3}{14} =$
$72 \div 8 =$	$420 \div 12 =$	$\frac{7}{8} \times \frac{15}{6} \div \frac{35}{12} =$	$\frac{5}{6} \div \frac{5}{12} \times \frac{2}{3} =$
$120 - (31 + 69) =$	$13 \times (40 - 36) =$		
$51 - 48 \div 4 =$	$(9 - 6 \div 3) + 19 =$		

今まで15年間子どもたちと学習をしてきて、2つのことが分かりました。

一つは、日本語の勉強を始めてから2年間くらい教科の学習が十分にわかっていません。何が抜けているか本人はわかりません。それが分かるのは後でなんです。例えば、高校受験のときに、塩水の濃度の問題が苦手なのは、日本に来た小学5年生のときの割合の勉強が抜けていたからです。ある程度日本語ができるようになってから、来日してからの2年間の教科の内容ができていないかをチェックしてみてください。そして抜けているところがあったら、できるだけ早くカバーすることです。

もう一つは、中学校に行って数学が始まったときに、正負の数が出てきますが、ついていけない生徒とついていけなくなる生徒がいます。どうしてか注意して見ていると、例えば買い物の計算や目に見えるものの数の計算はできるけれど、目に見えない数の世界、例えば分数とか小数とかグラフとか、そういう数の操作をあまり経験していない生徒がいます。そのままでは、中学校の数学が最初からわからなくなります。その力をつけるためには生徒にとってわかりやすい日本語で計算のやり方をやってみせて、ていねいに計算の練習を続けます。はじめのうちはすぐに忘れてしまいます。わからない状態を抜けて少しわかった感じがするまで、時間がかかるとお考えください。根気よく励まして繰り返し続けていくと、1年~1年半後ぐらいに笑顔が見られるようになります。

## II. 生徒の情報からコースデザインを考える

### II-(1)「外国人児童生徒受け入れの手引き」の例

それでは、コースデザインを考えるために、資料③「外国人児童生徒受け入れの手引(改訂版)」(文部科学省)

第三章の (P25) の「児童生徒を多角的に把握する」を見ましょう。

## 児童生徒を多角的に把握する P25

1. 来日年齢と滞日期間
2. 背景の言語文化(特に、漢字圏かどうかなど)
3. 発達段階(年齢)
4. 来日前の教科学習経験(国・地域によって学校のカリキュラムは異なる)
5. 基礎的学力(既習の教科内容についてどの程度理解力、知識があるのか)
6. 日本語の力(「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」等による測定)
7. 在籍している学級での学習参加の状況(一斉指導における理解の度合い、参加の様子は、取り出して1対1で指導している状況とは異なる)
8. 家庭の学習環境(家庭内の言語使用状況、保護者の言語能力、教科学習へのサポートの可能性)

来日年齢、今からどれくらい日本にいるか、あるいは今までどれくらい日本にいたか、来日前はどの言語の文化だったのか、家ではお父さんお母さんと何語で話しているのか、家庭学習が家でできるか、お父さん、お母さんの日本語の力はどのくらいか、そういう子どもの状況を可能な範囲で担任の先生と共有しておきます。それから来日前の教科学習経験、基礎的学力は、子どもたちが自分では気づかない部分です。子どもたちと学習していて、わり算のひっ算と分数のたし算がよくわかっていないなど、気づいたことを担任の先生に伝えていきます。

最近、日本生まれの子どもと学習することが多くあります。どうして日本生まれの子どもにサポートが必要なのかと思うかもしれません。話しているのを聞いていると、何も困っていることがないように見えます。でも、教科書を読むと知らない語彙が予想外に多いのです。子どもたちの中には言葉を使って考えたり活動することが苦手な子どもたちがいます。このことはこれからの私たちの課題でもあります。それから、国によっては、学校で教科書をほとんど使っていなかった、学校で教科書は共有物だから家に持ち帰らなかったという生徒もいます。みんなが日本の子どもたちようではありません。そして、家庭の学習についてですが、家に帰って、親に宿題を見てもらえる子どもたちはどのくらいいるのでしょうか。「この生徒は家に帰ると、わからないことがあっても親に助けてもらうことができません。」と担任の先生に伝えておく必要があると思います。

それでは、「外国人児童生徒受入れの手引(改訂版)」の事例のコースデザインを見ていきましょう。

<Aさん 中国出身 小学2年生>

コース設計例 Aさん 小2 中国 P35		
プログラム	来日2か月(初期段階)	来日1年(中期段階)
「サバイバル日本語」	衛生検査(うがい、爪切り、手洗い など)	学習発表会のお知らせ
「日本語基礎」	語彙 衛生検査に関する語彙 (ハンカチ、ティッシュ、爪切り、手あらい、うがい、きれい、きたない)	学習発表会の演目の語彙
	文型 「～をもってきます」	「学習発表会で、合唱をしました」 「上手にできました」
	文字 ひらがな (果物の語彙と関連付けて)	漢字(1年の漢字) 手、足、目、耳
「日本語と教科の統合学習」	1～20までの数の言い方と算数の足し算の読み方	算数のかけ算(在籍学級と同じ内容) +〇つずつ、〇つぶん、かける
その他	クラスでの自己紹介	学習発表会についての作文の発表会

61

資料③「外国人児童生徒受入れの手引（改訂版）」（文部科学省）第三章の図（P35）にAさんの例が載っています。

Aさんは、中国から来た小学校2年生です。来日2カ月のところで衛生検査を勉強しています。ハンカチ、ティッシュなど、毎日使っているものの言葉を覚えます。学校ではたいてい毎週1回衛生検査があります。

一人のベトナム出身の男の子がいつもハンカチを持って来ないために、学年の衛生検査でそのクラスはいつも合格しませんでした。次第に「アンくんが。」と友だちが言うようになりました。先生からその話を聞いて、アンくん「ハンカチとティッシュを持っている？」と聞いたのですが、わかりませんでした。実物を見せて、「持っている？」と聞くと、「持っている。うちにある」と言うんです。友だちに何回も「ハンカチ、ティッシュを持ってきてください。」と言われても、意味がわからず、衛生検査で何を自分がすべきか分かっていなかったんですね。その後、アンくんはハンカチ、ティッシュを持ってきて、そのクラスは合格しました。

Aさんのケースに戻ります。語彙としては、ハンカチ、ティッシュ、爪切り、文型として「持ってきます」、それからひらがな、語彙の勉強をしています。そして教科との統合学習として、数の言い方、算数の足し算の読み方、自己紹介、これを2カ月のときにやっています。それから1年たちました。低学年なので、まだ「サバイバル日本語」が続いています。学習発表会という具体的な設定の中で、歌を覚えるとか、友だちのせりふをよく聞いて順番を間違えずに自分のセリフを言う、そういう発表の練習の中で学習していきます。学習発表会の後では作文を書いて、みんなの前で発表して、友だちの発表を聞いて感想を言い合います。このように低学年の場合は、具体的な活動の中で学習を組んでいきます。

#### <Bさん フィリピン出身 小学6年生>

コース設計例 Bさん 小6 フィリピン P36			
プログラム	来日2か月（初期段階）		来日10か月（中期段階）
「サバイバル日本語」	修学旅行(電車の乗り方)		—
「日本語基礎」	語彙	電車に関連のある内容 駅名、新幹線、切符、ホーム	輸入、輸出
	文型	「～で、～に乗ります」 「～で、降ります」	受身表現(「このバナナはフィリピンから輸入されています」)
	文字	カタカナ ア行	1年の漢字、社会科「世界の中の日本」の漢字の読み
「日本語と教科の統合学習」	日本地図と地名		「世界の中の日本」フィリピンと日本
その他	クラスでの自己紹介		フィリピンと日本の関係の発表

次にBさん、小学校6年生です。来日2カ月のときに修学旅行の準備が始まります。先生から離れて生徒同士の行動もあるので、大切な勉強になってきます。語彙としては、電車に乗るための言葉。それから文型は、「乗ります」「降ります」。そして、2カ月で もうカタカナを勉強しています。次に、<日本語と教科の統合学習>では、修学旅行に行くところと日本地図の地名を結びつけていきます。低学年のAさんの場合は、目に見える具体的なもので学習しますが、高学年は具体物から離れて、地図とか地名とか、自分が行くところを頭に描きながら、学習をするようになります。そして、10カ月のときには、<サバイバル日本語>は終了しています。そして、<日本語基礎>ではすべて社会科につなげる「輸出」、「輸入」、「輸出されています」、「輸入されています」という表現を勉強しています。そして社会科の漢字の読みをしています。<日本語と教科の統合学習>では、「世界の中の日本、フィリピンと日本」という単元を勉強しています。

<Cさん ペルー出身 中学2年生>

## コース設計例 Cさん 中2 ペルー P37

プログラム	来日2か月（初期段階）		来日1年（中期段階）
「サバイバル日本語」	宿題(宿題の内容を理解する)		—
「日本語基礎」	語彙	宿題、教科書、ワークブック他 読む、書く、聞く、話す、出す	季節名、気候に関する語彙 数が増える／減る
	文型	「～から～まで」 動詞文(「～を～します」)	仮定表現(「～ば～」)
	文字	ひらがなの復習 部活動で使うカタカナ語彙	小学校3年以上の漢字 (人偏の漢字)
「教科の補習」	—	在籍学級で学んでいる数学の内容	
その他	部活動への参加		地域のボランティアとの交流

Cさんは中学校2年生です。来日2か月で「サバイバル日本語」として宿題をやっています。漢字とか数学の計算といった宿題だと思います。＜日本語基礎＞では語彙を増やし、文型は動詞文を中心に表現を広げているようです。文字は1か月でひらがなの練習をして、2か月目にはカタカナの練習に入っています。1年後を見ると、＜教科の補習＞として在籍学級で学んでいる数学の内容を学習しています。受験に向けて確実に必要な内容です。＜日本語基礎＞の語彙は社会科の用語です。中学生の学習のイメージは、教科書につながる学習に重点がおかれているのがわかると思います。

ここまでのところでご質問がありますか？

### <質疑応答>

#### <質問>

たくさん教材があるなかで、教材を選択をするポイント。

教材を一つ選んだら、その一つの教材をずっと使った方がいいのか。

#### <田所>

その子によって、向き不向きがあると思います。字が多い教材。絵が多い教材があります。字が嫌だという子どもたちには、あまり文字が迫ってこない教材を選んでいきます。例えば、『日本語学級1, 2』はほとんど字がないので、誰でも使えます。問題はこれの後に何を使うかです。『みえこさんの日本語れんしゅうちょう2』は字が大きくて読みやすい、質問もいろいろ変化があります。『中学生の日本語』は、パターンが似ていて単調かもしれませんが、生徒が知っている日本語を整理するのに効率よく、苦手な表現を選んで練習できます。具体的にはご自分で見ていくと、違いがわかると思います。メインの教材は決めた方がいいと思います。例えば＜サバイバル日本語＞のときに、『日本語学級1, 2』と決めたら、スピードを上げて通していきます。その次に、例えば『中学生の日本語』と決めたら、その中のポイントを選びながら進めます。全部やらなくてもいいです。教科の補習もありますから。

#### <質問>

日本生まれの子どもが、家庭環境の要因もあって、教科日本語の習得ができない場合、どのようにコース設計をすればいいか。

#### <田所>

日本語が分からないで来た子どもたちは、日本語学習を計画に沿って進めていけばいいですが、日本生まれの子どもたちは、どこがわかって、どこがわかってないかがわかりにくいです。先ほどお話ししましたが、まず、教科書を読んでどれくらい読めるか、わからない言葉や読めない漢字がどれくらいあるか、文章が読みとれるか確かめます。それから、「国語で、どんなときに困る？」と聞くと、漢字がわからない、話し合いがわからないと教えてくれます。それから計算の力をチェックしていきます。教科書がどのくらい読めるか確かめて、同じように「算数で、どんなときに困る？」と聞くと、「ここ。」と教科書で指さすこともあります。何で困っているかを見つけて、そこから重点的に始めます。わり算の筆算が正確でないことがわかったら、どこまでで

きていて、どこからわからないかを見つけることも大切です。そこを見つけたときにほっと笑顔になる生徒もいます。

文章がある程度読み取れている生徒ならば、次の段階として、書く練習を増やします。特に小学校高学年から中学生の場合、抽象的な思考の力が大切です。例えば質問します。「あなたにとって、大切なものは何ですか？」その話をしながら、その子がどれくらい自分の中の思いを言葉で表現できるか、自分の身近なことについて言葉で伝えていく力を見ていきます。日本生まれの生徒たちの中にはそれを面倒くさがって、単純な言葉で終わらせる生徒がいます。抽象的な語彙や、できるだけ助詞や接続詞を上手に使う文章を具体的に書けるようになることを目指していきます。中学生になったら、できるだけ数学と英語を途切れないようにします。

<質問>

月2回という限られた回数の中で指導に当たる場合、特に気を付けた方がいいという点。

<田所>

宿題を持ってきて、その宿題をやって終わりとなる可能性もあるんですが、特に中学生の場合は、生徒の希望を聞いて、ここではこれをしようねと方針を決めていきます。目指すのは、もちろん高校に入る勉強ですが、私は高校に入った後に授業を受けられる力が重要だと思っています。それで、いつも「高校の先生の授業がわからないと高校では単位取れないから頑張ろうね。これをやると高校でも授業が分かると思うよ」と言います。高校に入ってからの話をすると、張り切って勉強します。

<質問>

日本生まれの子どもで、お母さんが意外と日本語ができなくて、子どもは日常会話はできるけど、なかなか伸びていかないという子どもがいます。そういうときにお母さんにどんなアドバイスをするか。

<田所>

親御さんに会ったときに伝えるのは、家ではできるだけお父さん・お母さんの言葉で話してください。できるだけそれをがんばって続けてください。外に出れば日本語ばかりになって、子どもたちは自然に日本語が入ってくるんですが、家での親子の言葉をおろそかにすると、子どもたちは忘れてしまいますとお話します。今までに、親子で話ができなくなったと相談を受けたことが何回もあります。親子ともに困っています。親が子どもを導いていくためには、親が、自分の言葉で自分の大切にしていることとか、自分の文化を伝えていくことが大事です。もう一つは、子どもが、抽象的な言葉の意味とか、世界で起きていることを日本語で理解できるようになるにはとても時間がかかります。でも、親御さんだったら、今すぐ自分の言葉で子どもたちにどんどん教えてあげることができます。「環境問題」の意味、「世界平和」の意味、「今世界ではこういうふうになっているよ。」とか。子どもの母語の語彙を増やして、新しい言葉の概念を作り上げていくのが、親にできる役割だと思います。それは今、学校の先生にもできないし、私たちもできないし、まして子ども一人できないので、そこは親御さんにしっかりとやってもらうようにお話しています。

<質問>

外国出身の保護者の日本語の力と子どもの成績は関係がありますか？

<田所>

私は子どもの成績は親御さんの責任ではないと思っています。実際に見ていて、日本語の上手なお母さんは、子どもの成績も上がっていきます。日本語があまり上手でないお母さんが日本語で子育てをしていると、子どもたちの話の中身や話の進め方が混乱していると感じることがあります。お母さんの日本語が上手になるにこしたことはないのですが、お母さんにも日本語の勉強は必要だと思います。それはお母さんが、自分が必要だと思って勉強するのであって、親が上手にならないと子どもに影響があると言ってしまったら、親御さんはかわいそうかなと思います。それよりも私は、自分の言葉でいろいろなことを教えてあげてくださいと言っています。

## II-(2) 実習予定の生徒の情報をもとにコースデザインを考える

ここからは、みなさんが実習をする福島の日本語教室の生徒たちのことを考えていきたいと思います。

日本語教室の生徒の情報から、グループで、その子どもがどういう特徴を持っているのか、どういうことに気をつけて、どういう勉強していけばいいのだろうかということを考えてください。その後、ホワイトボードに書き出してもらい、順番にみんなで検討していきたいと思います。(グループで話し合い。45分)

<子どもA>

<受講者>

小学校6年の男子。母語は日本語。ルーツはフィリピン。日本とフィリピンを行ったり来たりしている間に学習が穴あき状態。分からないことを分からないと言えない。

### 対策

教科書がどの程度の理解できているのかみる。

学習の場では、「分からないことを分からないと言っていい」と伝える。

一つずつ分からないことを解決していく。

#### <田所>

二つの国を行ったり来たりすると、日本での勉強で抜けているところとフィリピンでの勉強で抜けているところがたくさんあって、繋がっていないところがたくさんあると思います。こここのところをどういうふうに埋めていくかですね。ただ、何が抜けているかは、本人にはわかりません。「わからないことをわからないと言っていいんだよ」と伝えて分かってもらうことはすごく大切だと思います。そして、わからないことを一つずつ解決していくといいですね。

この子がどんなことが好きなのか、興味を持っているのが何なのか分かった場合には、好きなことを突破口にして、それについてその子が何かを伝えることをやってみるのもいいかと思います。「なぜ？ どうして？ 科学の話」の人の体の不思議とか、そういうテーマのものを読むのもいいかもしれませんね。

<子どもB> ※出身地から本人が特定される可能性があるので出身地を伏せます。

#### <受講者>

小学校1年生。非漢字圏出身。母語も出身地の言葉。家では日本語を話していない。いずれ帰国する予定。

### 対策

小学校1年生なので、学習というよりも友だちと楽しく学校生活を過ごしてもらいながら、日本語に慣れていく。

ひらがたと日本の学校の一日の過ごし方、学校の場所の名前、学校でよく使う言葉などを入れる。

#### <田所>

帰国予定のある子どもは、帰国してから、帰った先での勉強を続けることも考えなければなりません。母語の読み書きを家でしっかりやっただけとご両親に伝えるのも大切だと思います。ご両親も日本のことだけを考えていらっしゃるかもしれませんが、帰ったとき、小学校2年生や3年生になったときに、他の子どもたちとできるように、家では母語での読み書きと算数をしっかり勉強するといいと思います。

学校での支援は、1年生ですから、今おっしゃったように入り込みで隣に座ってやるのがいいと思います。もし、教室からの取り出しであれば、給食のときの言葉や掃除のときの言葉など、みんなが使っている言葉をもう一回確認して、言葉と意味がつながるようにします。帰ることを考えると、日本のことをいっぱい知ってもらいたいですね。日本の子どもたちといっしょに遊ぶのも大切だと思います。

<子どもC>

#### <受講者>

中国人家庭の5年生の女の子。来日1年。母語は中国語なので、漢字を見るのは苦ではない。複文になると理解するのが難しい。物事を説明したり、客観的なことを説明したりするのは難しい。

### 対策

カタカナ語の語彙が少ないので、その子の興味がある分野でカタカナ語を入れる。

教科書が難しいなら、日常的な話題で文章を練習していく。

得意な科目に関連する語彙や表現を支援するというのを考えました。

#### <田所>

中国出身の子どもは、多分教科書は見ればわかると思うと思います。ところが、漢字の日本語の読み方がわからない子どもたちもいます。漢字の日本語の読み方の練習も少しずつするといいですね。まだ授業はわからないけれど、ある程度慣れてきているということですね。さっきおっしゃったカタカナの言葉は、練習すれば増えていきます。複文の練習は、例えば、理由を言うときに「～から～です。」とか、「～から、～と思います。」のような話の道筋を表す練習を少しずつ入れていくといいと思います。そして、算数の計算が大丈夫か確認して、教科書を少しずつ読む練習をしていくといいと思います。

<子どもD>

#### <受講者>

中学2年生の女子。フィリピン出身。お母さんがフィリピン人、お父さんが日本人。日常会話はほとんど問題ない。小学生の頃に学ぶ学習内容が習得されないまま現在に至っている。日常会話は問題ないのに、学習面になると、何が分かっている、何が分からないかもわからなくて、また質問もできないということで、自信を失っている。中学2年生女子ということで、メンタル面のサポートも必要。

### 対策

語彙を増やすために、友だちや先生や家族を巻き込んで、これは日本語で何というのか、またそれは漢字で書いたらどうなるのか聞いて、語彙を増やしていく。

人とのコミュニケーションを増やしていく。

得意な科目を作ってあげるか、得意な科目があれば、そこを伸ばす。

効率的な学習の仕方をいっしょに考えていく。

### <田所>

フィリピンと日本を往復しているんですね。往復している子どもは本当に気をつけてあげてください。例えば一つの国に行って、一つの言葉で学校の勉強がわかるようになるまで、1年半から2年かかる。それを2回やらなければならない場合もあるわけです。

中学校2年生だと、進路を決めなければならない時期です。具体的に進路として考えられるのは、子どもたちにとって、必ずしも勉強だけではなくて、その子が好きなことを探していく方法もあると思います。私立高校の絵やデザインのコース、調理や、自動車修理とか、そういう科目がある高校の情報を集めてあげるのも大切です。

将来、仕事をどうするかを考えていったときにも、この生徒の語彙を広げていくことは、すごく大切だと思います。もう一つは、英語の力がどれくらいあるのかということです。英語を生かすことは考えられないでしょうか？

### <支援者>

英語の授業ならわかると本人は言っているので、英検2級か準1級を目指し、自信回復を図っていこうという学校の支援の方針が決まりました。

### <田所>

やはり、この（対策の）「得意な科目を作ってあげるか、得意な科目があれば、そこを伸ばす。」ということが一番だと思います。英語が得意なら、一番はそこを伸ばしていく方法だと思います。選択肢が2倍あるんですよ。日本での選択肢とフィリピンでの選択肢もあると思うので、この子が必ずしも日本だけでなく、フィリピンでもいろいろ進路を見つけていく方法をサポートしていくことを考えてもいいと思います。

## <子どもE>

### <受講者>

中学校2年生の女子。母語がタガログ語。ルーツがフィリピン。家庭での日常会話がタガログ語かもしれない。小学校2年生で来ているので、教科の学習にはついていけるが、日本語の独特の表現が苦手。普通の日本の家庭の中で会話される常識が不足している。

### 対策

熟語や慣用句などを多く勉強する。

高校受験のために教科の学習を進める。

フィリピンのお母さんに進学のことを説明する。

### <田所>

学習はよくできているということで、英語を自信を持ってできるようにすることと、読んだり書いたりする力をつけていけばこの生徒は十分できるのではないと思います。

### <支援者>

英語は、小学校2年生のときに来ているので、日本人の子よりは発音はいいですが、点数が取れるかということ、日本人と同じように勉強しないと点数は取れません。しかし、英語弁論大会にフィリピン出身でネイティブ話者に近いから出られないということを悔しがっていました。

### <田所>

それは残念ですね。みんなで聞いて拍手してあげると、いいですね。

読書をする、外国から来た子どもたちもすごく言葉が増えて知識が増えていきますよね。自分の興味のある本を読んだり、小説を読んだり、どうですか。

## <子どもF>

### <受講者>

家族全員がネパール出身。中2の男子。来日して3か月間は家にいた。その後4月から日本語教室に通い始め、6月から学校に行き始めた。日本語に接するのは学校と日本語教室のみ。授業の内容は理解できない。

### 対策

DLAを使い、どのくらい日本のことや単語が分かっているのかを調べる。

サバイバル日本語で日常会話ができるようにする。文字の学習もする。

<田所>

12月にきて6カ月間、学校に行っていなかったんですね。<サバイバル日本語>の、『たのしいがっこう』にネパール語があります。『日本語学級2』もいいと思います。

ネパール語は、日本語と並び方が同じで勉強しやすいと聞きました。<サバイバル日本語>のこの時期、心のケアも大事です。この時期の男の子は、日本語がうまくなったら話そうと思っているのか、勉強しているときは一言も話さない子もいます。ですから、男の子の心にうまく寄り添うことも大事かと思います。それから、受験が迫ってくるので、進学に関する情報も親御さんにしっかり伝えていくことと、高校の種類、高校後の進路を示すこともとても大事ですね。

<支援者>

私の日本語教室では、みんなで専門学校で学園祭に行き、専門学校でどんなことを勉強しているかを見せてもらいました。イラストを描いている学科の人がイラストを描いてくれたり、パティシエの方がケーキ作ったのをご馳走になったり、仕事に結びつくことを勉強していることを体験することができました。

<田所>

すばらしいですね。具体的に自分の将来を描けることがこの年齢の生徒にはすごく大切なので、たぶん明るく未来が見えるようになったんじゃないかと思います。中学生の場合は将来の見通しがすごく大切になってきます。

## <子どもG>

<受講者>

ネパール出身、中学3年男子。Fさんの兄。Fさん同様、来日6か月間は学校に行かなかった。高校入試を目指しているが、ほとんど日本語が読み書きできない、日常会話にも困る状態。Fさんと同時に日本語の勉強を始め、意欲的に勉強してFさんより学習が進んでいる。4月に学校に行ったときは、6月に日本語が出来るようになってから学校に来てくださいと言われた。日本語教室でひらがなとかサバイバル日本語をやって、ちょっと会話ができるようになったので、中学校に受け入れてもらえた。

### 対策

サバイバル日本語を徹底して教える。

生活面でのサポートも必要になる。

担任の先生とか地域の人の力を借りて、日本語に少しでも触れる機会を増やす。

<田所>

日本語ができるようになったらと言われたんですね。行きたいと言ったら、どうぞと受け入れなければいけないんですけど。たぶん、Gさんは、ほめて、頑張れって言ってあげると、伸びていくと思います。実際の進学は大変ですね。短期決戦ですね。そうすると面接と作文に絞って勉強したらどうでしょうか。おそらく自分の会話力を上げるのにも役に立つと思います。

<受講者>

質問ですが、僕らが英語を覚えるときに、テレビを見たり映画を見たり YOUTUBE を見たり、聞いて覚えるというのがありますが、そういうのは必要ですか？

<田所>

好きなものから覚えていくといいと思います。歴史だったら、漫画がいっぱいありますよね。YOUTUBE もあります。気をつけるのは、そこで、わからないまま放っておくと、それはそのままになってしまいます。例えばTVを見ていて、わからない言葉があったら書き留めて、後で聞いて教えてもらったという生徒がいました。そういう確かめをやるかやらないかが、後に影響あるみたいです。だから、聞き流しではなく、それらをうまく使って知識をためることも大事だと思います。

## <子どもH>

<受講者>

19歳の男性で、パキスタン出身。2年前に来日して、仕事もしている。日本語の基礎はできている。本国で、基礎教育8年しか受けていなかったため、中学3年生の3学期に中学に編入し、中学校を卒業。現在、高校浪人中。来春、定時性の高校を受験予定。仮定の話が苦手。

### 対策

興味関心のある仕事の車関係の語彙はたくさん持っているようで、その語彙に結び付けた話で、サポートできるのではないかなと思います。

<田所>

高校入学の条件が9年間の教育を受けているということなので、この生徒のように8年だと高校受験ができなくなります。中学卒業できたのは大切です。車関係の仕事をしているので、持っている知識に結びつけた実用的な学習が役に立つと思います。定時制の高校に入ったとして、卒業できるかどうかも重要です。例えば仙台の場合だと2年から3年に進級する場合に、単位がとれないと進級できなくて、そのままだと卒業できなくなってしまいます。基礎的な学力も必要です。そして、提出物をしっかり出すとか、学校には遅れない、休まないところをしっかりと先生方に見せて、日本の学校生活に順応できるということも大切だと思います。将来に向けて、きつとうまくできるよと励ますことも大事だと思います。学校に行っていないのであれば、できれば、いろんな教室に行って勉強して生活のリズムを整えることも大事だと思います。

### Ⅲ. 児童生徒等の将来と進路指導

児童生徒等の将来と進路指導ということで、「外国人の子ども・サポートの会」の活動の話と、第1回目の市瀬先生の課題で「多文化の子どもたちの未来を開くために」（以下、「事例集」と表記）を読んでもみなさんの疑問点にお答えをしたいと思います。

- 『外国籍児童生徒サポート事例集 多文化な子どもたちの未来をひらく』（MIA 宮城県国際化協会）  
[http://mia-miyagi.jp/pdf/kodomo\\_casestudy.pdf](http://mia-miyagi.jp/pdf/kodomo_casestudy.pdf)

2011年に震災が起きて、その後生徒が減りましたが、現在は生徒の人数は回復しました。日本全体の変化と同じ変化をしています。宮城県の場合は、小中学校にサポーターを派遣するシステムとして、仙台市の教育委員会と宮城県国際化協会（事例集を発行）の登録システムが県全体をカバーしています。一人の生徒に40回、合計80時間の学校派遣となっています。それから、仙台観光国際協会に「サポート仙台相談デスク」ができました。これは、派遣されている指導協力者と学校とを繋ぐ役割を持っています。教材セットを作って学校に貸し出ししたり、定期的に学校と連絡をとったりしています。

宮城県の公立高校の入試に関して「事例集」の中に出てきた「特別措置」「配慮申請」ですが、これは中学校の校長先生が、生徒が受験を希望する高校の校長先生に申請を出します。高校の判断になりますが、入試科目から社会・理科を減らしたり、時間を延長することができます。英語が得意な生徒は、英語科や国際コースがある学校を選んでいきます。この「特別措置」は、試験を受けるときだけの配慮であって、結果に対する配慮ではないと教育委員会は言っています。ですから、外国から来た生徒だからと言って、勉強しなくても入れるということではありません。

「外国人の子ども・サポートの会」は、今年16年目になります。小学生16人、中学生16人、高校生25人が在籍しています。この数を見ても、高校生が勉強が大切だと思って来ていることがわかります。当会では生徒会員に比べるとサポーター会員の人数が常に多いです。受験の生徒たちや高校に入った生徒たち一人ひとりに複数のサポーターがついています。高校に入学することと、3年間高校生活を続けて卒業できることが大切です。

現在の現実的な問題として、出身国によって、あるいは、例えば中国であればどの地域の出身かによって、受けた教育の違いがあると感じています。とてもよく勉強してきた生徒も来ます。授業を受けずに教室でゲームをやっている何も言われなかったという生徒も来ます。ですから、子どもたちの受けてきた教育に差が出てきている感じがします。

母国の中学を卒業後に来日した生徒は、例年2～3名います。日本の義務教育年齢を過ぎて来日した生徒は、原則では日本で中学に入ることができません。そうすると、どこにも属することができない。たまたま私たちの会の情報を知って来る生徒たちは、いっしょに勉強しますが、もしかしたら、会の情報を知らない生徒、来られない生徒がいるのではないかといつも思っています。中学を卒業してきた生徒たちが、どうやったら進学していけるのか。これを保障していく必要があると思っています。子どもたちの受け入れは、多文化共生だけでなく教育の観点で、社会全体でしっかり考えていかなければならない時期だと思います。現在宮城県では、中学を卒業して来日した生徒の選抜方法としては調査書、成績証明書、中学校卒業証、それから、作文、面接、数学・英語の一般入試で選抜します。時間延長は10分くらいあります。

<質問>

志望校への働きかけは誰がするのか。

<田所>

中学に編入した生徒の場合、全ての進路指導を中学校の先生が行います。中学校を卒業してから来日した生徒の場合、既に義務教育期間を終えているので、中学校に編入することができませんから、生徒の保護者が直

接高校と連絡をとりながら入試の準備を進めます。生徒と保護者の熱意は欠かすことができません。当会のような支援団体は、保護者と生徒をサポートする立場になります。

中学を卒業してきた生徒の受験に必要な書類として、在留資格の証明、母国の中学校の卒業証明と成績証明をそろえる必要があることを早めに保護者に話します。それから、できるだけ早く、その生徒がほぼ毎日勉強できるように複数のサポーターでチームをつくり、日本語、数学の日本語、英語の日本語のサポートをします。高校に入ることも大きな目的ですが、大切なのは入学後に授業が受けられる力をつけることです。来日してから受験までの期間が短くて4ヵ月、長くても1年間ですから、高校の先生には途中経過を見てもらいます。日本語が少し話せるようになったところに、生徒と家族といっしょに志望する高校を訪問して教頭先生と面談をします。そして、入試前の配慮申請をする手続きで再び高校で生徒と家族の面接がありますから、そのとき最初できなかった日本語がこんなにできるようになりました。これだけ頑張れますというのを見てもらいます。

#### <田所>

「事例集」についての質問で、成功事例だけでなく、失敗した生徒はいないんですかという質問がありました。失敗ということが子どもに関して何を意味するか、私はわかりません。いろいろなケースがあります。高校入試で不合格になった生徒はいます。例えば、公立高校に不合格になったら、すぐに2次募集を調べます。合格発表から3日以内に、いくつかの公立高校、あるいは私立高校で、もう一度2次募集のチャンスがあります。保護者にそれを伝えて、生徒もいっしょに受験の準備をしに高校に行きます。ほとんどの高校でその場で面接がありますから、保護者が、生徒の来日の経緯を先生に説明します。生徒が、高校でどんなことをしたいか、将来の希望を話します。それがとても大事です。支援者は、その生徒が来日してからどのような学習をしたかを説明します。そして、高校に入学したら、卒業まで学習サポートを続けることもお話しします。

今までずっと見ていて、高校の先生方はたくさん生徒を見ていますから、実際に生徒を見てもらうのが1番だと思っています。いちばん最初の生徒が合格した後、教頭先生に、高校がどういう生徒を受け入れるか質問したことがあります。3年間の学校生活が続けられるか、それを判断して合格を決めると言われました。入学したらすぐ、学校を休まない、遅刻しない、提出物をしっかり出す、学校の行事に参加しましょうと私は生徒たちに言います。それは進学に関しても重要なことです。センター試験を受けて大学に行くのはとても難しいです。ですから、推薦入試をめざします。

これまでの生徒たちの進学を見ていて、気になることがあります。中学以降に来日した生徒たちは、高校3年間で力をつけて大学に行く率が高いのですが、日本の小学校で学んだ生徒たちは、小学校高学年から中学校の学習で苦戦する傾向があります。日本の小学校で学んでいる子どもたちの学力をどうあげていくのかが課題だと思っています。

#### <質問>

「MIA 宮城県国際化協会」、「外国人の子ども・サポートの会」、「さっと日本語クラブ」は連携を取っているのか。

#### <田所>

来日した小学生・中学生は、「さっと日本語クラブ」（仙台市青葉区中央市民センター）で土曜日の午前中に日本語のグループ学習ができます。日本に慣れるまで友だちといっしょに学習できるので、子どもたちには心が解放される場所だと思います。そして、土日や平日の放課後に仙台駅の近くの「外国人の子ども・サポートの会」で1対1の勉強をします。「MIA 日本語講座」（宮城県国際化協会）は大人のための講座で、時間が午前中ですから、学校に行っている子どもたちは行けません。母国で中学校を卒業して来日した生徒たちは、午前中に「MIA 日本語講座」で週4日間、初級と中級を勉強できます。そして、午後には「外国人の子ども・サポートの会」で数学と英語の日本語それから、作文や読みの勉強に特化して勉強します。

#### <質問>

日本留学試験を受けて大学に入る方法はどんな子どもに向いているのか？

#### <田所>

日本留学試験は外国籍の子どもたちは受けられるはずですが、外国に住んでいる高校生の日本留学の目的でられたのだと思いますが、現在、日本の高校に在籍している子どもたちも受けています。どの大学のどの学部学科を受けるかによって留学試験の科目を選ぶのですが、日本語力は必ず問われます。理系の場合、数学と理科、文系の場合、総合学科で基礎学力がついていることが求められます。それを受けて合格したら、それぞれ希望の大学を受験していきます。福島だと福島大学、会津大学、福島県立医科大学、医療創生大学、郡山女子大学などが留学生試験の結果を受け入れています。

#### <質問>

高校に進学をしない子どもの選択肢や可能性は？

<田所>

パキスタンから来た生徒、Sくんは、2011年の2月に来日して中学2年生に編入した直後に震災に遭いました。中学3年生の勉強は十分にできませんでした。仙台市内の工業高校の定時制を受験するつもりでしたが、12月に家族と県北に引っ越したために受験をあきらめました。中学卒業後に、「勉強を続けようね。できれば高校に行こうね。まず自動車免許を取ろう。」と話し合っていました。アルバイトの合間に、家の近くの人が自動車免許を取るために漢字の勉強を手伝ってくれました。実際には車の免許は国に帰って取ってきましたが。

Sくんは、ずっとコンビニでアルバイトをしていたのですが、「悔しいです。後から入ってきた日本人の学生のほうが、給料が高いんです。僕は、帰化したい、日本国籍を取りたい。」と言うんですね。いっしょに法務局に行って、どうしたら日本国籍を取れるかを調べました。「小学校3年生くらいまでの漢字を覚えてください。しっかりと暮らしていれば大丈夫ですから」と言われました。Sくんはそのうち日本国籍を取ります。でも自分でも、問題は国籍ではないと思っています。コンビニの仕事で発注をするとか、棚卸をするときに、漢字が読めないの、仕事を任せられないから給料が低いのだと店長に言われたそうです。

そして、20歳になった2019年の4月に県北の定時制高校を受験するところまでいったのですが、同時に地元自動車の組み立ての企業から誘いが来て、Sくんは企業を選んで就職しました。声をかけた人は、Sくんがコンビニでの働きぶりをずっと見ていたそうです。

その後、宮城県の県南の白石にパキスタンから小学生が来て、近くのサポーターが自宅まで日本語サポートに行ってくれることになりました。私とそのサポーターを家族に紹介するために、生徒の自宅に行くと、そこに県北に住んでいるSくんがいました。「どうしてここにいるの？」と聞いたら、白石の生徒の親から「勉強をみてる人を紹介されたのだが、不安だから来て欲しい」と言われたそうです。私は初めてそこで、「そうなんだ。同胞の人たちに頼りにされているんだなあ。」と実感しました。今は、宮城県国際化協会でもウルドゥー語の通訳が必要なおと、進路ガイダンスのようなおと、彼が通訳をしてくれています。将来は自動車関係の仕事をしたいそうです。

また、中学の途中で中国に帰った生徒が2人います。この生徒たちのことを話そうとすると、家庭のことを話さなければなりません。親子の関係がうまくいっていないと、子どもたちはいるところがなくなってしまうようです。みなさんに考えて欲しいのは、子どもたちが何故日本に来るかです。中には、日本に来る時点で、親との死別や離婚の辛い体験をしている子どももいます。リセットというのでしょうか、親が母国でうまくいなくて、日本に来た家族もいます。帰りたくても母国に帰るところがない子どももいます。

<質問>

遠隔型オンラインの方法を用いた支援もあり得るのか

<田所>

遠隔型オンラインの方法で、私の知っているところでは、「にほんご×こどもプロジェクト (NICO PROJECT)」です。<https://www.nihongo-kodomo.net/> これは日本語学校の授業を配信しています。あとは、「とよた日本語学習支援システム」があります。<http://www.toyota-j.com/> ただ、これは大人の日本語支援になっていません。

以上が、今回の内容になります。長い時間みなさんありがとうございました。